

福島復興から日本の立て直し探訪

会津から 後進へ

その6

まほろば宮下社長のルーツ案内記

旅の案内人：神奈川県在住

大橋 しのぶ

前回までのあらすじ

二〇一五年五月、まほろばの宮下社長と母方のルーツが同じ福島県・会津若松である事が分かりルーツ探しのお手伝いをする事になりました。七月、福島県二本松市で講演会をするという奥様の日程に合わせて、宮下ご夫妻を会津若松にご案内致しました☆☆☆

原発周辺の地へ

会津若松市を後にして、宮下ご夫妻と私は福島県の浜通りにある、いわき市へと移動しました。

福島県は都道府県の中で第三位となるほど面積の広い県で、縦に三分割して海沿いは浜通り、中央は中通り、内陸地方は会津地方と呼ばれています。各地方で微妙に風習や気質が違うと言われており、特に会津地方は、保科正之公に付いて長野か

ら来た先人が多いせいか、あそこは県内県だから、と言われてるのを聞いた事もあります。

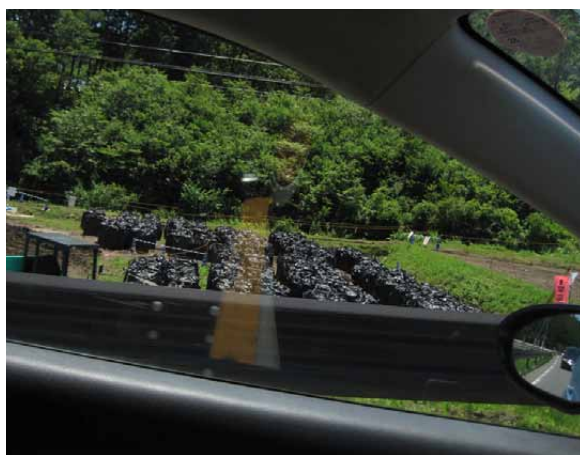
奥様の講演会が開催される二本松市は中通りにありますが、その前に、宮下社長の奥様と交友がある茨城大学の名誉教授で総合農学研究所の代表でもある中島紀一先生と落ち合い、浜通りをご案内していただく事になりました。

国道六号線は福島県の海沿いに宮城県までずっと続いている道路です。福島第一原子力発電所の事故により、一部区間で通行が規制されていましたが、二〇一四年九月一日からは通行が可能となっていました。遠くから原発が見える場所もあるとの事、福島の状態を知ってきたいとの宮下社長の御意向で、この道を通る事になりました。

しかし二〇一五年のこの時点でも、道路脇に車を停めたり外

に出る事は禁止との事で、窓も開けずにエアコンは内気循環するように指導されました。そして警戒の為でしょうか、途中で何台ものパトカーとすれ違いました。

六号線を走っていて、あちらこちらで見かけたのは除染作業中という青い旗、そして山と積みまれた、汚染土を詰めた黒い袋でした。この黒い袋はどうするあてもなく現在も増え続けているのでしょうか。





夏草が青々と広がるこの美しい福島の大が、こんな醜いもので埋め尽くされているのを見るのはどうしようもなく胸が痛む光景でした。

帰宅困難区域は無人の町が広がっていて、また道路沿いの家

には防犯の為にしようか、各家に鉄柵のようなものが設置されておられ、それはまるで昔見たゾンビ映画のワンシーンのようでした。映画では夜になると襲ってくるゾンビに備えて人々がこうしたバリケードを作っていたのです。「このシニカルな光景は本当に現実の出来事なのだろうか。」まるで異次元空間に迷い込んだような錯覚に陥りました。震災から四年が経ち、日常を取り戻したかのように見える日本ですが、こんな恐怖映画のような場所が同じ日本に存在していたのです。

根本さんの畑

やがて車は原発から二〇キロほど北にある南相馬市の小高地区という場所に入りました。この南相馬で長い間、有機農業に取り組んできた根本洗一さんを訪問する為です。中島先生は、この根本さんの畑や田んぼの放

射能検査を毎年実施され、農産物を購入されるなどしていました。

この地域は夜間に宿泊する事ができないので、根本さんは避難場所のある相馬市からわざわざ通って田畑を守っているのです。付近をちょうど除染作業している様子で、何人かの作業員の方が敷地に入っていました。



左・中島先生 右・根本さん



二〇一五年七月のこの時点で、小高地区で畑や田んぼを続けているのは根本さんただ一人でした。この田畑で作物を作っても、買ってくれる人、食べてくれる人がいないかもしれないのに耕し続ける姿、父祖の地



を何とか守り蘇らせようと模索し続ける心には本当に頭が下がりました。七五歳を過ぎてもなお奮闘するその御苦労は「美味しんぼ（福島の真実編）」という漫画にも取り上げられました。

今回ご案内下さった中島紀一先生も登場されています。

※「美味しんぼ（福島の真実編）百十巻一九四ページ」。百十一巻一七四ページ」

根本さんに、私が宮下ご夫妻に同行している理由を聞かれたので、ルーツが同じ会津若松というご縁で、昨日まで会津をご案内していた事をお話すると、「そうですか、ご先祖様はとなみ斗南に行かれたのですが、それはご苦労されましたね。」とおっしゃって下さいました。

さすが福島県人は斗南藩の名前や歴史もご存知なのだなあと驚くのと同時に、こんな過酷な状況の中で、百年以上前の、他人の先祖の苦労まで労わる事ができる、その慈悲深さに涙がこ

ぼれそうになりました。根本さんの方こそ、これから何十年、いやもしかして何百年もかかるかもしれない父祖の地の浄化と、第一次産業復興の最前線で戦っておられるのに…。ここで私が泣いている場合ではない、と思わず背筋を伸ばしました。



その後、根本さんからいただいた素敵な絵手紙には「ゆっくり前へいっぽ」と書かれていました。

福島が日本の根

ところで、「美味しんぼ」という漫画はご存知のとおり、現在百十一巻まで出てい

て、アニメや映画やゲームにもなった人気漫画です。主なテーマは「食」ですが、もうひとつの裏テーマは主人公の山岡士郎とその父親の海原雄山との確執であると思われます。

連載三十年、百巻以上に渡って争ってきたこの父子が和解する日は来るのか、またその時はどんなきっかけで和解できるのだろうかと思っていたのですが、根本さんも登場する、最新刊の百十一巻でついにこの二人は和解を果たしました。



その前の百十巻冒頭で主人公・山岡士郎は海原雄山にこう言われます。

「おまえはそろそろ自分の生えてきた根を知るべきだ。今度の取材は福島の実を知る事に加えて、お前の根を知るためのものだ。おまえに自分の根を知る勇氣があるか。」

そして二人は福島の各地取材しつつ、福島県伊達市にある靈山神社という場所を訪れ、雄山とその妻とし子はこので巡り合い結婚したのだという過去が明かされました。

その靈山神社で山岡士郎は海原雄山から再び、

「お前の根っこは福島だ、その訳を考えろ」と、言い渡され、士郎はこう答えます。

「福島が俺の根っこだというのは…、おまえとおふくろがここで出会って結婚し、それで俺が生まれたからなのか。」

しごく妥当な答えだと思うのですが、海原雄山はこう言い放ちます。

「なに。私を、そんなことを考える軟弱ものだと言うのか！ 無礼もの！ なんのためにおまえは福島を見て回っているのだ。しっかりとものを見ろ。見たものを心の奥底に届けてかみ砕け。そしてお前の根を掴め。」

その後も福島の現状を見て回った士郎は靈山神社に雄山を誘い、密かに持っていた両親との記念写真を手渡し、ついに親子の和解を果たします。そして百十一巻末、雄山の事を父と呼ぶようになった士郎は、こう答えます。

「俺の根っこが福島だという、父さんの言葉についてだけど、

原発の事故がこのまま収まらず、拡大したら福島県は駄目になる。それは福島にとどまらず日本全体を破壊する。福島未来は日本の未来だ。これからの未来を考えるのに、まず福島が前提になる。世界のどこにいうと俺の根っこは日本だ。原発事故は、日本という国がいかに大事なものか思い知らせてくれた。福島を守れることは日本を守ることだ、であれば俺の根っこは福島だ。」

「うむ。私の問いに対する答えとして、それでよからう。」

士郎はついに雄山の問いに答えることができたのでした。



ふくしま農家の夢ワイン

根本さん宅を後にして、二本松市にある「ふくしま農家の夢ワイン」というワイナリーに移動しました。このワイナリーは震災後の二〇一二年に、農家八人の有志で設立されました。

耕作放棄地を開墾し、ぶどうを植え、数十年使われていなかった稚蚕所を改装して作業所にしたそう



です。フェイスブックにこう書かれています。

「美味しいお酒を作ること。

美味しいお酒、楽しい農業を通じて、仲間を増やすこと。美しい田舎の風景を残すために、耕

作放棄地にブドウを植えること。地域の担い手を育て



るために、醸造を通し付加価値の高い農業を実現することを目指しています。

良い歳をしたオヤジ達がワイナリー実現に向け頑張っている。ブドウを植え、建屋を整備し……少しずつ前に進んでいますので、ご支援宜しくお願いします。」

福島は皇室へも献上する桃

や、ミカン・柿・梨・サクランボなど四季折々に素晴らしいフルーツが採れる果物王国でもあります。美しい田舎の風景を子孫に残すという志を持って企業した福島のオヤジ様たち、ぜひ応援したいものです。

あぶくま農と暮らし塾

今回このワイナリーで「あぶくま農と暮らし塾」の顧問をされている中島先生とのご縁で、まほろば専務（現在は顧問）の宮下洋子さんの講演会が開催されました。

この塾は「震災・原発事故以降、社会が大きく変化している中、この地での暮らし・農業の意味を再確認して未来に向けた取り組みを考えるため」に結成されたそうです。

この日の講演会の主題は「医療最前線 腸内フローラと低炭水化物ダイエット」という事で、宮下洋子さんは冒頭で、主に良い油の選び方や摂取の仕方を講演されました。またそれだけにとどまらず、食や健康の世界に入ったきっかけや、ゼロワンテクトに巡り合った経緯、そしてその活用エピソードなど、興味深い多くのお話をされていました。

程の衝撃でした。そして一昨年からはルーツを同じくする、まほろばの宮下社長とも巡り合わせていただき、更に生き直し、新しい探訪の旅を続ける道を開いてくれたのです。

今では福島はただ血のルーツであるという以上に、ご縁のみなもとであり魂の故郷にもなっています。

昨年の七月、根本洸一さんは避難先の相馬から小高の自宅へ帰宅する事ができました。

今年の年賀状にはおいしそうなミカンと共に「小高で暮らす事五か月、元氣になりました」と書かれていました。やはり故郷の我が家が一番なのですね。

どうか福島の人達が一日も早くもとの美しい里山を取り戻せますように。そして美しい日本の国土が、これ以上福島



のように汚染されることがありませんように。

もしこの福島の悲劇を教訓として日本という国がより良い未来を築く事ができたなら、山岡士郎さんの言うとおり、福島が日本人全ての命の根っこであり、心のルーツだと言い表してもいいのではないのでしょうか。

福島の犠牲がただの犠牲ではなく新しい日本の礎となれますように、大自然の蘇生のルーツとなり、日本人の心の懐かしい故郷となれますように。

またその希望の光がいつの日か、日本だけでなくこの青く美しい地球の隅々にまで広がりますように。

そしてその心こそが、よく宮下社長がおっしゃっている「情緒」という宇宙の核心へと繋がる、人としての道なのではないでしょうか。

そのために自分に何ができるのか、たとえゆっくりでも、福島の方々に、先祖に、そして子孫に恥じないように、一步一步前へと進んで行きたいと思っています。



しのぶもぢずり（ネジバナ）

くみちのくのしのぶもぢずり
みちるべ

くのにみちの
みちとたずねて

（しのぶもぢずりというネジ花の咲く陸奥福島がルーツの一つだった。より良い国の未来へと繋がる道をこの地から探して行きたいものだ。）

二〇一七年二月十一日

大橋しのぶ

前回お届けしました『会津から近江そして倭へ⑤』についてですが、下記の通り2点、追記と訂正がありますので、どうぞよろしくお願いいたします。

①執筆にあたり、参考文献として下記の三冊から多くを引用させていただきました。ありがとうございました。

『会津学問史根本史料 横田三友俊益の年譜』
全編著 布澤忠夫 新人物往来社
『会津藩教学の祖 横田俊益』
著者 相田泰三 会津史談会
『倉田氏家譜』

編集者 倉田秀治 発行者 倉田元治

②保科正之が補佐した将軍は綱吉ではなく家綱です。お詫びして訂正いたします。

●著者プロフィール

大橋 しのぶ

寺田本家 23 代目当主故・寺田啓佐さんとの出会いにより、蔵の微生物をテーマにした小説を書き、小冊子を発行することに。ペンネームで発表した小冊子作品は 5 作になる。2015 年、まほろば社長宮下周平と共にルーツ探しの旅の案内人として同行。神奈川県在住。

※表紙写真：花見山より福島市内の信夫山と吾妻連峰を望む